



## 受難の主日 (マタイ 27:11-54)

「奪われた姿」が栄光と輝きに満ちている

2020年の受難の主日は、すべてを奪われて行う典礼となりました。「すべてを奪われた」と言えば、残念な気持ちになりますが、イエスの受難を黙想することで、「すべてを奪われた姿」が輝きを放ち、栄光の先取りと確信できるようにしましょう。

イエス様の姿をまず眺めてみましょう。イエスが十字架にかけられると、兵士たちはイエスの服を「くじを引いてその服を分け合い」(27・35)しました。兵士たちはイエスの服を奪ったのですが、イエスは「奪われた」とは言わないでしょう。無理矢理取り上げられたとしても、「与えてくださった」ものなのです。

イエスは「再び大声で叫び」(27・50)息を引き取られました。人々の罪と、不正な裁判で、イエスの命は奪われたのです。けれどもイエスはご自分の命を「奪われた」とユダヤ人たちを非難するのでしょうか。そうではありません。イエスは「命を与えてくださった」のです。

ここから、客観的には「奪われた」と見えることでも、「奪われた姿」が輝きを放ち、栄光の先取りとなることは可能だと分かります。今年、私たちは修道院で受難の主日を迎えました。シスターたちは客観的には多くを奪われた方々かも知れない。たとえば、季節に合った服、好みの服を着ないで、修道服を着ています。一般の人々から見れば、いろんな服を着るチャンスを奪われていると見えるかも知れません。

ではシスターたちは、季節の服、好みの服を着るチャンスを奪われていると不平不満を持っているのでしょうか。そうではありません。シスター方は、自分で決心して、いろんな服を着る自由を、神におささげしたのです。自由に着ることを、自分から神におささげしている姿が、輝きを放ち、栄光の先取りになっています。

司祭と、奉献生活者は独身を守っています。結婚して、家族ができ、家族とともに暮らすこともすばらしい人生です。きっと一般の人々から見れば、「結婚するチャンスを奪われている。取り上げられている」と見るでしょう。けれども本当にそう思っているのでしょうか。

そうではありません。司祭も、奉献生活者も、準備の段階でよく考えて、「結婚し、家庭を持つ生き方」を神におささげしているのです。結婚することもできた。家族を持つこともできた。この生き方をよく考えて神におささげしている。独身生活もまた、神と人々の前で輝きを放ち、栄光の先取りとなっているのです。

イエスは人々から服を奪われ、命を奪われ、もっと活動できたはずの未来の時間も奪われました。イエスの「奪われた姿」は、悲惨な姿なののでしょうか？決してそうではありません。イエスにとって、自分から与えてくださったものなので輝きを放ち、復活という栄光の先取りになっているのです。



## 聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

ご自身を与える愛は、はるか昔に準備されていた

聖木曜日、イエスは弟子たちと最後の晚餐を囲み、生涯で最も意味深い弟子たちとの時を過ごしています。今、ミサをささげながら、同じ時間に心を合わせて祈っている田平教会の信徒の皆さんを思い浮かべ、イエスが残された愛の記念を、すべての人と分け合おうとしています。

今年は、イエスが入念に準備をしてからすべてのわざを行われたことを考えたいのですが、弟子たちとのこの最後の食事は、いつ準備をされたのでしょうか。

「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」(マタイ 26・17)。このときすでにイエスは準備が整っていて、すべての指示をその場で与えました。弟子たちは命じられたとおりに動くだけでした。

見た目には、弟子たちに尋ねられる少し前に、準備をしておられたように見えます。事実は、はるか昔に準備が始まっていたのではないのでしょうか。理解するには、最後の晚餐の意味を考える必要があります。

最後の晚餐は、イエスが聖体の秘跡を定めるための食事でした。聖体はもちろん、イエスの御体と御血です。イエスの御体と御血は、いつ準備されたのでしょうか。弟子たちが過越の食事の準備を尋ねたそのときでしょうか。

そうではありません。イエスの御体と御血が準備されたのは、マリアに天使ガブリエルが神のことばを告げに来たときでした。私たちが養われるイエスの御体と御血は、およそ30年も前、見える準備のはるか昔から、準備され、整えられてきたのです。

私たちはミサにあずかったとき、聖体拝領の1時間前から飲食をせず、準備の時間に充てます。だれも、「3時間前から食事を控えて、ミサに備えよう」とは思いません。私たちが養う主が30数年前から私たちの食べ物となるための準備をしてきたのに比べると、私たちの準備はあまりにも少ないと思います。

準備が足りないではありません。イエスがご自身を与えてくださるまでに費やした時間に比べたら、私たちの準備や必要な時間ははるかに少ないので、どれだけ感謝しても感謝しきれないということです。

今年、聖木曜日の典礼が実施されていたとしても、「洗足式は中止してください」という通達が来ていました。この洗足式も、イエスの準備は直前の準備だけではなかったと考えています。洗礼者ヨハネの洗礼を受けたとき、洗っていただく必要の無い方が、悔い改めの洗いの水を受けたのです。「わたしの足など、決して洗わないでください」(13・8)。ペトロのことばが洗礼者ヨハネに重なります。イエスははるか前に、足を洗うほどの深い愛を準備しておられたのです。

イエスは私たちにご自身を食べ物として与えてくださいました。はるか昔から、準備しておられました。イエスの深い愛に、私たちは身を委ねましょう。今はただ、イエスの深い愛に感謝する時です。イエスの愛に洗われ、愛の記念をありがたく受け取る時です。



## 聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

神はすべてのことから善を引き出される

今日、全世界が、主のご受難を黙想します。単に思い巡らすのではなく、どうしてお亡くなりにならなければならなかったのか、一人ひとり胸に手を置いて考えます。私が犯した罪をイエスは背負って、十字架の上で命をささげてくださったのです。

イエスが人間を救うために万全の準備をしておられたことを今年の聖なる一週間で黙想していますが、イエスがお亡くなりになる準備を着々としておられたと考えるのは、不謹慎なことではないでしょうか。どんな人間でも、いついつ亡くなるために今日抜かりなく準備するなど考えるのは、命を大切にすることにならないと思うのです。

一つだけ、こういう言い方は可能でしょう。「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。」(ヨハネ 10・18) 再び受けるために、準備します。三度にわたる受難の予告さえも、「命を再び受けることもできる」ことを弟子たちに理解させる準備の時間でした。

「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」(ヨハネ 12・32) イエスが上げられたのは、人々の歓喜の声によってだったのでしょうか。そうではありません。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」(19・15) 宗教指導者に扇動された群衆の叫びによって、イエスは上げられたのでした。しかしイエスが「地上から上げられる」のは、この方法をおいて他になかったのです。

神はあらゆることから、善を引き出すお方です。「地上から上げられる」本来であればこれは高められること、栄誉を受けることのはずです。それが、十字架にはりつけにされることで、「地上から上げられる」ことになったのです。人々の敵意から、「死と復活」という驚くべきわざを成し遂げたのです。何も見えなくなっ、人類が決定的な背きをイエスにおこなったその時に、神はイエスに栄光をお与えになったのです。

イエス・キリストのことばと行いは、しばしば「分裂」をもたらすもととなりました。「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。」(ルカ 12・51) しかし同時に、イエスは生涯にわたることばと行いによって、救いの計画の完成を準備してこられたのです。

私たちの罪が、イエスを地上から上げてしまいました。十字架の上ではりつけにされていますが、あの十字架は罪を犯した私たちの「手」です。一人の人間の手では、イエスを地上から上げることは決してできません。何千何万という人の手が重なって、イエスを地上から上げたのです。一人ひとりの罪は些細なものかも知れません。しかしその罪が何千何万と重なって、イエスを地上から上げてしまったのです。

私たちは逃げることなく、今はただ、胸を打ち、赦しを願ひましょう。主はすべての罪を背負って復活し、私たちを救ってくださいます。



## 復活徹夜祭 (マタイ 28:1-10)

あなたは 2020 年のもう一人のマリア

主の復活おめでとうございます。ここには実は誰もいません。まるでそれは、イエスが復活した瞬間のようです。もしイエスが復活して墓から出られたのであれば、今宵のように、誰もいなかったのでしょうか。私はここから、今年の復活徹夜祭の説教を始めたいと思います。

今年の小教区黙想会で、ベルゴリオ枢機卿が教皇フランシスコとして選出される直前に、カリタスの黙想会で語った言葉を思い出しました。彼はカリタスの黙想会参加者に「(問題は)イエスを聖具室に縛りつけていること」だと語り、イエスが戸口に立って呼びかけるヨハネの黙示録の一節を引用して、この話はイエスが中に入れてくれと戸を叩いている話ではなく、内側に閉じ込められているイエスが外に出してくれと言っている話であると思うようになったと述べたのでした(黙示録 30・20)。

まさに、今年の復活徹夜祭はその思いでこの場にいます。私は、イエスを聖櫃に縛り付けるような説教をしてはいけません。イエスが外に出て、大胆に語るような説教をしなければならないのです。その助けになればと思い、一つの思い出話を紹介します。

私は、大神学生時代にあっと驚く神父様に出会いました。その神父様は私と、私の先輩を外に連れ出して、初めて見る物、初めて聞くこと、初めて味わうものを経験させてくださいました。これは宇都宮で本当にあった出来事です。

最初は最高級ランクのステーキをおごってもらいました。そのあと生まれて初めてスナックに連れて行ってもらい、お店の人と歌を歌いました。見るもの聞くものすべてが、あっと驚くものでした。

しかしその神父様自身はそのすべてにまったく流されることなく、連れて行ってくれる前も連れて行ってくれた後も、まったく変わらない神父様でした。今日の福音朗読で例えるなら、番兵に過ぎなかった私は見るもの聞くものすべてに恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになったのでした。

神父様は圧倒的なお姿で教えてくださったのです。「恐れることはない(中略)。あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ(中略)。さあ、出かけて行って弟子たちに告げなさい。」復活したイエス・キリストを知った人は、何にも縛られることなく、まったく自由にキリストを告げ知らせるのである。私はそのことを出会った神父様から教わったのです。

今や、イエスは何にも縛られず、復活してすべての時間、すべての場所、すべての国に福音を告げ知らせます。ミサが中止され、自分の殻に閉じこもっている場合ではありません。あなたも私も、復活したキリストを自分の殻に閉じ込めることなく、「私を出して、告げ知らせに行ってくれ」と叫んでいる復活したキリストのお手伝いをしましょう。このメッセージを聞いたあなたは、2020年にイエスを墓に訪ねたマグダラのマリアともう一人のマリアなのです。



## 復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

信じて、ミサ再開の日を待とう

あらためて主の復活おめでとうございます。イエスが復活の栄光を受けたとき、ご自身が死んで復活すると、誰よりも心の準備をさせてもらったのは弟子たちでした。ここに今年は注目しましょう。

マグダラのマリアは、墓から石が取りのけてあるのを見ましたが、彼女の心は準備ができていませんでした。弟子たちは三度も、イエスの死と復活について予告を受けたので、出来事の向こうにあるものを捉える準備がいくらかできています。しかし完全には捉えきれません。

ヨハネ福音書はもう一人の弟子の様子を「先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」（20・8）と描いています。死と復活の予告がなければ、とてもここまで理解が及ばなかったでしょう。ただ、予告があったとしても、弟子たちの力だけで理解し、信じることができたのかということとそうでもないようです。直後にこう書かれています。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」（20・9）

もし、人間の力だけでイエスの復活を捉えることができるのであれば、違う書き方になっていたでしょう。「二人はようやく理解することができた」そういう結び方になったかも知れません。「入って来て、見て、信じた」この直後に「二人はまだ理解していなかったのである」と続けるのには、何か理由があるでしょう。

マタイ・マルコ・ルカ福音書には、三度にわたってイエスの死と復活の予告があります。私たちの感覚からすれば、どんな人間も三度指摘されれば十分理解できるでしょう。それでもペトロともう一人の弟子は、イエスの復活の出来事にたどり着けなかったのです。なぜでしょうか。

それは、「人間の理解を超える出来事は、ただ示されただけでは理解できない」ということなのだと思います。決して理解できないわけではなく、イエスのほうから近づいてくださって初めて、人間の理解を超える出来事にも心と身体が目が開かれるのです。

弟子たちはイエスの死後、完全に希望を失ってしまいました。マグダラのマリアは墓に行きましたが、彼女は終わってしまった出来事にすがりつこうとします。人間の力が及ぶのはここまでなのです。イエスが近づいてくださるとき初めて、復活したイエスが示そうとする未来に、限りある人間の目が開かれていくのです。

私たちも、今年の四旬節、受難の主日と大きな悲しみを背負いました。ミサに参加できず、心の中では死んだも同然でした。しかしここで、過去にしがみついてはいけません。イエスと同じく死んだのでしたら、復活したイエスが近づいて、未来に目を向けさせてくださいます。

私たちの死んだも同然の体験は無駄ではないのです。死んだからこそ、未来に目を向けてもらえるのです。全世界の教会が、再び復活するための「霊的な死」を体験しました。イエスは必ず私たちを、復活の希望に招いてくださる。固く信じて、ミサ再開の日を待ちましょう。